

知的障害者の「親ばなれ子ばなれ」の概念整理に向けた研究

－「親亡き後」問題を手掛かりとして－

○ 日本福祉大学大学院福祉社会開発研究科社会福祉学専攻 氏名 松本和剛 (会員番号 009372)

キーワード：知的障害者 親ばなれ子ばなれ 親亡き後

1. 研究目的

本研究の目的は、「親亡き後」問題を手掛かりに、知的障害者本人（以下：本人）、親、支援者、研究者が「親ばなれ子ばなれ」をどのように考え受け止めているかを明らかにし、その概念整理に向けた枠組みを検討することである。本人と親の高齢化に伴い「親亡き後」問題の急増が予想される。親の9割以上がこの問題に不安を感じており、解決には親が生きている間に行う子の将来への計画が必要である。関連研究として自立の視点からの研究があるが、日本での親子関係を分析する枠組みとしては、個人主義的な自立概念でなく、親子の絆や家族中心の文化を反映した「親ばなれ子ばなれ」の概念が重要と考えられる。

2. 研究の視点および方法

参加者間の相互作用を通じて得られる理解を提供し、特定のテーマについての集合的な視点を得るのに有効なフォーカスグループ（以下：FG）の手法（Barbour 2024）を用いる。研究協力者は、「親ばなれ子ばなれ」に興味を持つ本人、親、支援者、研究者の7名である（表1）。各自の居住地が遠方のためZoomを使い行った。焦点を絞り議論を活性化させる

ID	年齢	立場	知的障害のある子の年齢
A	60代	研究者	なし
B	50代	母親	20代
C	50代	母親	20代
D	20代	知的障害者	本人
E	50代	相談支援専門員	なし
F	50代	研究者兼母親	本人
G	50代	養護教員	なし

ために、30分から1時間程度の「親ばなれ子ばなれ」に関するテレビ番組の録画を観てから始めた。番組鑑賞時間を含めて1回2時間程度で月1回開催している。2023年1月から2024年5月までの合計17回を対象とする。FGを行うに際しては参加者の同意を得て映像を録画した。録画データは逐語録化し、質的データ分析法に基づき焦点的コードからサブカテゴリとカテゴリを生成した。カテゴリを【 】, サブカテゴリを[ ]で示す。

3. 倫理的配慮

本研究は日本社会福祉学会研究倫理指針を遵守している。また、日本福祉大学大学院「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会規程に基づく審査の結果、承認を得た（承認番号：23-046）。なお、利益相反（COI）はない。

4. 研究結果

分析の結果、24のサブカテゴリと8つのカテゴリが抽出された。まず、【世代間の価値観の変化】は[家族を優先する親][親と違う価値観を持つ]を統合して生成された。【地域社会による子育て支援】は[子が社会を育てる]から生成された。また、【規範的影響】は[自立するのではなく自立させられる][血のつながり][社会規範に流される][産

んだ責任という社会規範]から,【「親亡き後」問題における意思決定支援】は[知的障害のある子の意思決定が十分に尊重されない「親亡き後」問題]から生成された.【親が子を「手放す」ための準備と教育】は[子のできることを増やしたい親][子の生きる力を親が信じる][親が子を手放す力]から,【当事者同士の相互支援】は[自分の思いを伝える場][物語を変える][好きなことからつながる人間関係][他の親から気付かされる「親ばなれ子ばなれ」のサイン][相談できる仲間]から生成された.【親の幸福感による「親ばなれ子ばなれ」の促進】は[子が思う母らしさ][愛着と添い寝の文化][親の幸せな姿][ケア役割の変化]から,【相互尊重と親密さからなる親子の関係性】は[親子間の関係性][良い子を演じる][承認されることで「親ばなれ子ばなれ」が変化する][対等で親密な関係]から生成された.以上より,「親ばなれ子ばなれ」がどのように考えられ,受け止められているかの要素が明らかとなった.

## 5. 考察

『親ばなれ子ばなれ』とは,親子が適度な距離を保ちながら自立を促す過程(松本 2019)であるとする仮説をもとに,8つのカテゴリーを分析し,3つの観点を導き出した.まず,親と子の成長に基づく親子の関係性が挙げられる.ここでは【親が子を「手放す」ための準備と教育】が必要であり,【世代間の価値観の変化】を理解し,【親の幸福感による「親ばなれ子ばなれ」の促進】が重要となる.また,【相互尊重と親密さからなる親子の関係性】が基盤となる.次に,環境の整備を含む社会的支援が挙げられる.【地域社会による子育て支援】は,知的障害のある子を親だけで育てるのではなく地域社会全体で育てる環境を含み,【当事者同士の相互支援】は,自らを語れる場や相談できる仲間づくりの機会を提供する.また,子のケアの責任は親が負うべきだ,などの親や子を苦しめる【規範的影響】に翻弄されない社会環境の整備が求められる.これにより,親も子も孤立せず社会的支援を受けやすくなる環境が整う.最後に,子の意思決定が尊重される将来計画が挙げられる.

【「親亡き後」問題における意思決定】では,子の将来への計画は親ではなく子の願いや思いが尊重される問題解決の視点を持った意思決定でなければならない.

以上,本考察により,親と子の成長に基づく親子の関係性,環境の整備を含む社会的支援,子の意思決定が尊重される将来計画という,「親ばなれ子ばなれ」の概念整理に向けたひとつの枠組みを明らかにすることができた.これにより,親と子が互いに尊重し合うことで,親も子も成長できる環境が整うことが期待される.

## 文献

Barbour, Rosaline (2019) *DOING FOCUS GROUPS*, 2nd ed., SAGE. (=2024, 大橋靖史監訳『質的研究のためのフォーカスグループ』新曜社.)

松本和剛 (2019) 「成人期における知的障害者の『親離れ子離れ』における変化とその要因 - 「性と生」を学ぶ軽度知的障害のあるひとによる劇団活動を通して-」『日本福祉大学大学院福祉社会開発研究』(14) 65-74.